

=====  
GCOE Newsletter  
[No.17 2009/2/24]

-----  
平成20年度第2回gCOE論文賞の募集について（再掲）  
gCOE第5回・第6回国際研究集会の開催について（再掲）  
次回のオープンレクチャーについて  
「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約  
gCOE研究教育員ブリーフィング要約  
佐藤教授の最終講義（報告）  
=====

---

■ 平成20年度第2回gCOE論文賞の募集について（再掲）

---

グローバルCOEでは論文を募り、「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2009年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。

応募の受付期間は2009年2月19日（木）～2月27日（金）です。

応募方法について詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/>

---

■ gCOE第5回・第6回国際研究集会の開催について（再掲）

---

第5回国際研究集会『知のテキスト化』  
日程：2009年3月5日（木）～7日（土）  
場所：パリ東大学（フランス）

第6回国際研究集会『歴史テキストの解釈学：針路、解釈実践、新たな諸問題』  
日程：2009年3月7日（土）～8日（日）  
場所：東京国際フォーラム

前回お知らせした国際研究集会の詳しい開催内容が確定しました。Webページからご覧ください。  
<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/activity/activity01/>

---

■ 次回のオープンレクチャーについて

---

次回のオープンレクチャーは4月に開催されます。詳しくは次回のニュースレター、またWebページでお知らせします。

---

■ 「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

---

各論V（重見晋也）

本講義では、テキストの存在様態についての考察を先行研究に遡って検討し、さまざまな分野における研究対象としてのテキストへの可能なアプローチを探ることを目的としたものであった。検討対象とした先行研究は、M・フーコーの『知の考古学』、P・リクールの『時間と物語』、ナラトロジー理論、ガダマーの『真理と探究』であった。

フーコーにおいては、「ディスクール/エノンセ」の区別を基礎として1つ1つの「エノンセ」の集合総体として「ディスクール」が定義づけられており、テキストとしての存在様態は「ディスクー

ル」の存在様態に等価なものとして考察されていることを確認した。また、問題点として「ディスクール」が「エノンセ」を構造化していく基準が非常に曖昧であることも確認した。

リクールにおいては、独自のミメーシス過程の考察の中で、3層に重層化した3つのミメーシス段階が作者から読者へのコミュニケーション過程において、作者から発せられたテキストが線状的に処理されていくことを確認した。こうした考え方によって、テキストの持つ意味の重層化という側面は説明できるものの、ここのミメーシス過程の役割がしばしば曖昧になっているという問題も確認した。

一方で、ナラトロジー理論ではコミュニケーション過程は捨象されて、テキスト内の構造分析として自律するテキスト概念が形成されたが、学説史的にはそうした自律構造が批判され、テキスト外の要素を取り込んでいったことを確認した。

ガダマーにおいては、テキストの内的要請が重視され、主観主義的な相対主義を回避するような、イデア的存在としてのテキストが前提となっていることを確認した。

以上の考察から、ガダマー的解釈学の持つ非-相対主義的な側面をテキスト構造あるいは理解プロセスとして基礎付け、それらがコミュニケーション過程の中でどのような役割を持つのかについて、個々の研究領域毎に具体例を取り上げながら検討していくことが必要であると確認した。

## 各論VI (ゼーン・ゴーベル)

本講座では、テキスト布置の解釈学的研究から得られる知見を、国際的な状況に於ける英語による研究発表へと応用する。とりわけ、大学院生がテキスト間の幾つかの関係を理解する手助けをする一方で、彼らにそれらの理解を自らの研究の準備と口頭発表を通して応用する機会を与える。授業では2つの主要なテキスト間関係を検討する。一つは、学生自身の学問的背景から来る前テキスト(つまり自らが専攻する分野に於ける理論や方法論に関する知識)とメタ・テキスト(つまり、研究上の疑問への適用を介した、それら前テキストに対する自らの解釈)の間の関係である。もう一つは、これらのメタ・テキストがパラ・テキスト或いはジャンルとして表現され得る方法に関するものである。例えば、パラ・テキストは要約、研究報告書、雑誌論文、学術書、学会発表等の形を取り得る。学生は次に解釈学的テキスト布置に関する理解を、自らの分野に於ける研究上の基礎(つまり前テキスト)を検討することで応用する。この過程を経ることは、学生が学問的な知識の基礎にある隙間を見つけ出す助けとなる一方で、そのような知識の基礎の解釈にも寄与する。手短かに言えば、学生が次いで2つの異なる種類のパラ・テキスト——例えば、自らの現在の研究計画の要約や口頭発表——として再文脈化し得るメタ・テキストを形成することである。

---

### ■ gCOE研究教育員ブリーフィング要約

---

#### 第11回ブリーフィング(1/22)

小澤 実「日本におけるヴァイキング社会像の受容と解釈」

ヴァイキングが実際にどのような集団であったのか、学者によって必ずしも統一的な見解があるわけではない。その理由は、ヴァイキング像を生み出す学者の拠る学問伝統、イデオロギー、そして史料の性格がそれぞれ異なることにある。したがって、どの地域に軸をおくかによって、演繹されるヴァイキング社会像は大きく異なる。

日本におけるヴァイキング社会像(=北欧中世像)の基礎は、山室静(1906-2000)と荒正人(1913-79)が築き、その後、北欧に関心を持つ歴史学者も徐々に増えた。しかしながら多くは、ヴァイキングが実際に生きた時代からは隔たった中世アイスランドの史料に基づいてその社会像を練り上げた。発表者は、アイスランド社会のあり方をヴァイキング社会に投影する従来の作法に批判的であり、内外の同時代史料が比較的多いデンマークを対象としてヴァイキング社会像の再構築を図ることの利を確認した。

---

### ■ 佐藤教授の最終講義

---

2月4日（水）14時～15時にgCOE拠点リーダー、佐藤彰一教授（西洋史学）の最終講義が文学研究科237室で行われました。  
佐藤教授は来年度からは名古屋大学特任教授となり、引き続き文学研究科gCOEの拠点リーダーとして統括運営を担当します。

次回のメール版NewsLetterの発行は2009年3月中旬を予定しています。

.....  
GCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」  
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration  
<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

---

NewsLetter No.17

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2009 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

---